

# 戦後台湾俳句小史（六）

## 第四期（成熟期）の台北俳句会の活動

### ——『台湾俳句歳時記』刊行以後の 台湾季語句の消長

磯 田 一 雄

#### 1. はじめに

『台北俳句集』の第30集（2003年8月）から第39集（2012年8月）までを台北俳句会の第四期（成熟期）とする。ただし句集表紙の表示によれば、第30集は本来中華民国89年度（2000年度）のものであり、第38集（2012年月）は中華民国97年度（2008年度）、第39集（2012年8月）は中華民国98年度（2009年度）の句集で、それぞれ3～4年遅れで刊行されている。従って第四期は実質的には『台湾俳句歳時記』（2003年4月、言叢社）の刊行から、『台北俳句会四十周年記念集』（2010年12月）刊行を中心とした時期と見てよい。

黄靈芝と台北俳句会にとって、第四期はいろいろな意味で収穫の多い華麗な時期となった。第一に台湾の俳句とそのリーダー黄靈芝は、『台湾俳句歳時記』の刊行によって初めて日本で知られるようになったと言ってよい。この業績により黄靈芝は2004年度に「正岡子規国際俳句賞」を受賞している。それまでも多くの会員が頻繁に日本を訪れているに関らず、黄靈芝は台湾を一步も出ることがなかったが、この授賞式に出るために初めて訪日した。松山と東京の双方の授賞式に出席したのだが、黄靈芝にとっては、これが生涯でただ一度の海外旅行となった。

2006年度には「海外での日本文化の普及に貢献した」という理由で日本政府の叙勲（旭日小授章）も受けている。こうしたことから、日本俳句を台湾に広める上で功績があった、という意味に受け取られやすいが、それはあくまで日本から見た捉え方であって、少なくとも台湾人とし

ての黄靈芝の本来の意図や業績は、それとは異なる、あるいはそれを越えたところにあったといえよう。黄靈芝や台北俳句会にしてみれば、「日本文化の普及」や日台親善のために俳句活動をしてきたわけではないのである。

いっぽう戦後台湾では俳句や短歌を含めて日本語による文学作品は、長い間正規の「台湾文学」とは認められてこなかったが、この時期に至ってようやく徐々に市民権を得られるようになったといえる。一私立大学の賞ではあるが、黄靈芝が真理大学から「台湾文学家牛津（オックスフォード）賞」を受賞したことはその象徴であろう。2006年11月25日に台湾台南県の真理大学麻豆校で「第十届台湾文学家牛津獎 暨 黄靈芝文学国際學術研討会」が開かれている<sup>1)</sup>。残念ながら黄靈芝は病気のため、この研討会には出席できず、自宅で賞を受けている。

これらの受賞は大いに喜ばしいことではあったはずだが、黄靈芝は極めて淡々としていて、内輪には殆ど何も積極的に語っていない。「国際俳句賞」受賞については、台北俳句会2004年9月句会の手書きの「会報」の末尾に「消息」として、以下のように書いただけである。授賞式に参加して帰国した後、台北俳句会の会報では何も述べていない。

この度、第三回正岡子規国際俳句賞を頂くことになりました。この<sup>ママ</sup>年になって賞を貰ってもどうせ可愛いあの子が嫁に来てくれるわけでもないので辞退しようかとも思いましたが、台湾俳壇のためにも貰っておいた方がよいと皆が申します。それに推薦して下さい先生への礼儀からも、など、しかじか、云々。

ところで第三期は主として「台湾歳時記」の『燕巢』連載を通じて台北俳句会と燕巢俳句会との関係が密接で活発だった時期だが、第四期もやはり『燕巢』と関係は続いている。しかしそれが地味になり形式化していった時期ともいえる。『燕巢』では、『台湾俳句歳時記』について主宰・羽田岳水は何も述べようとしていないし、第三期と違って台湾にかかわりのあるような句や文もほとんど載せていない。2007年には燕巢俳句会が創立50周年を迎え、3月2日に祝賀会、『燕巢』の同年8月号が「創立50周年記念号」となり、黄靈芝は「五十周年を祝して」および「台湾の中文俳句、——私の、そして私たちの」の二篇を寄稿してい

る。前者は黄靈芝一流の見解を加えながらも一応祝辞になっているが、後者は燕巢俳句会はもちろん、台北俳句会とも直接関係のない「台湾俳句会」（1994年創設の漢文俳句の会）のことを長々と寄稿したわけである。ここにも微妙なずれがあるといえよう。

既に第三期から、『春燈』の場合と同じように、台北俳句会員の何人かは『燕巢』の会員、あるいは同人になって投句していたし、『燕巢』主宰の羽田岳水はそれを積極的に進めようとしていた。また「台湾燕巢俳句会」の幹事には台北俳句会員がなっていた。しかし、『春燈』の場合と違って、台北俳句会の主要メンバーが『燕巢』誌上で競い合うというようなことにはならなかったし、「台湾燕巢会」は台北俳句会や、台北春燈句会と並ぶ独立の在台北俳句会として定着するまでには至らなかった<sup>2)</sup>。

燕巢俳句会はこのように台北俳句会と縁の深い俳句結社ではあったが、この前後から会員数の減少など、次第に衰退していく時期に入っていた。主宰・羽田岳水は高齢の上健康が悪化して、適当な後継者もないことから、『燕巢』は2010年12月号で終刊となった。一時期はかなり多かった台北俳句会員の参加も次第に減少し、終刊直前には台湾からの投句もほとんどなくなっており、両結社間の関係はいわば自然死的な終末を迎えたのであった。一方台北俳句会はまさにその2010年12月に創立四十周年記念句会を迎えたのである。

第四期は台湾在住でない日本俳人の投句が次第に増えてくる時期でもある（「賛助出詠」の羽田岳水と福島せいぎを除く）。第30集（2003年6月）ではまだ2人だけだったが、第39集（2012年8月）では6人となる。第五期になるとこの割合は一層高まり、第44集（2017年2月）では8名だが、全投句者が40名に減少したので、5人に1人の割合となった。これは一時期在台中参加して帰国した人の外、日本の俳句会との交流が増え、歓迎句会に参加した人が帰国後も欠席投句者になるためである（訪台時以外は当然欠席投句となる）。

刊行された『台湾俳句歳時記』が実際にこれまでどのくらい活用されたか、あるいは現にされているのかを検証することも重要であろう。これは第四期だけでなく、当然第五期以降にも及ぶ。差し当たり台北俳句会で月例会の課題（兼題）にどのくらい、その台湾季語が出されているか。「台湾季語」を含む句がどのくらい詠まれていたか、見る必要が

ある。それは台湾的な俳句の定着度を示すものである。実は台湾季語句自体は、既に第1集から見られるものだが、それが「台湾歳時記」の連載や、『台湾俳句歳時記』の刊行によって、時期ごとにどう変わって来たかをも、ここで見ることにしたい。

最後に台北俳句会の改名の問題に触れておく。既に台北川柳会が2002年11月台湾川柳会と改称、台北歌壇も2004年度から台湾歌壇と改称されている。当時「台湾正名運動」が起きており、多くの企業や機構などが「中国〇〇」「中華民国〇〇」を「台湾〇〇」と改名していたが、この趨勢が文芸界にも及んだのだという。そのため「台北俳句会」も「台湾俳句会」と改名すべきであり、殆どの会員がそれを望んでいる、という声があがった。これに対して、黄靈芝は「結論として私は余り気乗りがしない」といい、その理由を2004年3月の句会報に添付したプリントで、概ね以下のように答えている。

- 1 会発足当時「台湾俳句会」としなかった理由は「反国思想」の嫌疑がかけられやすかったからであるが、それだけではない。政治と商業を会に持ち込まないのは「文芸という一片の浄土」を守るためである。
- 2 創設34年にもなる「老舗」が看板を変えるのはほぼ決まって破産した時だ。
- 3 名称を変えたら、もう身罷っているような台北俳句会のかつての会員たちが淋しがるとはならないか。
- 4 誰かが何かを提唱したらと言って、その後について行くのは、私は好きでない。それに私はすでに1994年に、「台湾俳句会」という漢文俳句の会を創設している。
- 5 台北俳句会は黄靈芝一人の会ではないから、大部分の会員が希望するなら改名したらよい。ただし名を変えたからといって直ちに実態が変わるわけではないから、主客顛倒しないように。今後事情が変わったら時流に乗ってまた改名するようなことにならないように。また「台湾俳句会」が既にある以上、名前は奪えないから、「第二台湾俳句会」とするか、あるいは合併するしかないだろう。

会員に影響したのは案外最後の理由だったかもしれない。以後こうし

た声は起こっていないようである。

## 2. 正岡子規国際俳句賞受賞と黄靈芝の受賞記念講演

台北俳句会第四期の幕開けとなった『台湾俳句歳時記』は、日本の俳壇で評判がよかった。いくつかの俳誌が取り上げているが、『現代俳句』2003年12月号は「ブックエリア」で次のように書評している。捉え方が要領をえていると思われるので、少し詳しく紹介しよう。

真赤なハイビスカスの描かれたクリーム色の表紙をめくると、そこには396語に及ぶ台湾の季語がぎっしりと詰め込まれている。美しい花や鳥、市場に並ぶ魚や果物、季節の行事や祭の数々。一語一語に日本語による解説が付され、台湾の俳人による例句が九つずつ掲載される（八句ずつ＝引用者）。解説の文章は実に歯切れよく、学術的な記述に加え、社会的洞察や人間観、諧謔性にあふれ、強い説得力と爽快さをもって読者に迫る。さらにカラー写真の頁もあって、鮮やかな色と形が読み手の想像力をいやが上にも逞しくする。博物誌を読むようで、小説を読むようで、図鑑を読むようで、読む人すべてを台湾のとりこにしてしまう、そんな歳時記である。

季語の分類法も独特だ。まず全体を「人事」と「自然」のに類に分け、「自然」には「天文地象」「植物」「動物」の項を設ける。四季に代え、「暖かい頃」「暑い頃」「涼しい頃」「寒い頃」という区分を用い、「人事」には「年末年始」を加えている。歳時記の地域性や成立ちを考える上でも、実に興味深い一冊なのだ。

読者がまず魅了されるのは、この本にあふれる台湾の豊かで多彩な自然だろう。例えば果物。婆羅密、佛手柑、釈迦など、解説無しには想像もつかない果物が並ぶ。それがまた皆一様に美味しそうなのだ。  
含笑花、相思樹花、杻菜死了といった面白い名前の植物達、  
青竹糸、龜殼花と呼ばれる花の名のような毒蛇たちも登場する。

天文もまた面白い。(中略)

……人事の項を一見して驚くのは祭りや行事の多さである。祝日や仏教関係の祭事に加え、道教の祭や、アリツ祭（平埔族の先祖祭）豊年祭（高山族の収穫祭）など少数民族の祭もある。戦前の日本技師の法

会などというのもあって、如何に台湾が多く文化を受け容れ、その  
坩堝になってきたかが分る。

著者は巻末に収められた『戦後の台湾俳句』という文章の中で、台  
湾の統治主体と文化の関係について述べている。(中略)

本書の刊行にしても、日本の俳誌『燕巢』に九年にわたって連載さ  
れた原稿を基にし、数年の加筆訂正と二年にわたる校正の末に出版さ  
れたものだと聞く。このことからの著者の「日本語の彫刻」に傾ける  
情熱が窺えよう。作者は同じ文章の中で、日本の統治下での学生生活  
の記憶や、戦後の台湾での日本語文芸活動の置かれた立場について述  
べているが、それらは幸せなものには映らない。その著者がなぜこれ  
までに日本語を愛し、執着するのか。そのことが、我々日本人に対し  
て本書が発する永遠の問いとなろう。

言い換えれば『台湾俳句歳時記』が人目を惹いたのは、大部分の事項  
が日本人にとって未知の事柄だからだということになる。台湾俳人に  
っては、これほど詳しい解説はほとんど必要ないのみならず、そもそ  
も台湾俳人として台湾季語だけで俳句を詠む訳ではないどころか、もとも  
と日本の歳時記にある季語を用いて俳句を詠んできたのである。台湾季  
語で詠むのはむしろ例外的といってもいい。日本の句会に投句するので  
あればなおさらのことである。『台湾俳句歳時記』に日本の歳時記と共  
通の事項(ただし同じものでも日本と台湾ではあり方が違うことが多  
い)がかなりあるのもそうした事情を反映している。それにふつう俳人  
が歳時記を見るのは、季語の意味よりもむしろ季語ごとの例句である。  
その点この『台湾俳句歳時記』は、季語の解説が台湾をあまり知らない  
日本人にとって適切であると同時に、8句ずつの例句は作句上も参考に  
なるであろう。

日本における『台湾俳句歳時記』に対するきわめつけの評価は、愛媛  
県文化振興財団による「平成16年度 正岡子規国際俳句賞」の受賞者  
2名のうちの一人に黄靈芝が選ばれたことであろう。「授賞理由」にいう。

季語・季題という俳句の約束事と台湾の風土の独自性とに真摯に向  
き合うとともに、日本語と台湾語、日本文化と台湾文化双方への愛着  
と美意識を昇華させ、独力で『台湾俳句歳時記』を上梓した。季語・

季題の解説は俳味に溢れており、俳句と歳時記という型を借りた優れた文芸作品である。同時に、季感というものが様々な風土において再創造可能な普遍性を持つことを示し、俳句の可能性の拡大に寄与するところ大である。

そこで2003年11月7日と8日に、松山と東京（椿山荘）で、「第3回国際俳句フェスティバル」の記念講演会が行われた。これまで海外旅行など一度もしたことのない、しかも病氣療養中の黄靈芝が、台北俳句会員の強い勧めもあり、会員4人と親族2人に伴われて、両方の授賞式に参加したのである。燕巢俳句会主宰の羽田岳水も松山に飛んだ。彼は翌春の『燕巢』で次のように言っている。

九年余りの長い間、燕巢に掲載して来た台北俳句会長黄靈芝先生執筆の「台湾俳句歳時記」は、一昨年四月東京の言叢社から出版された。異色ある独自の体裁と内容は俳壇各方面から注目を浴びていた。縁りの深い燕巢もその喧伝を期して来たのだった。幸い第三回正岡子規国際俳句賞事業として昨年十一月七日と八日の両日、松山と東京で多数関係の方方のご参集のなか授賞式が行われた<sup>3)</sup>。

この羽田岳水の文が現れたのは、授賞式から4か月後のことである。「喧伝」とは多分「宣伝」の誤植であろうが、7回にわたって『燕巢』に「広告」を載せたことを言うのかもしれない。いずれにせよ、岳水自ら『台湾俳句歳時記』について口を開いたのは、刊行後2年も経ってからのことになる。しかもごくあっさりと、『燕巢』での連載がそのまま出版されたかのように書いている。岳水としては、『台湾俳句歳時記』を黄靈芝・羽田岳水共編のような形で出したかったのかもしれない。だが刊行されたのは黄靈芝の単著だったのである。こうして台湾季語の編纂は、黄靈芝側には「国際俳句賞」受賞という有終の美をもって、黄靈芝＝台湾側の主体性を貫ぬいた快挙になったが、企画をもちかけた『燕巢』側の影が薄れてしまったような印象がある。

この記念講演会での講演内容を黄靈芝は、「第三回正岡子規国際俳句賞受賞に際（1）及び（2）」と題して『燕巢』2005年3月号に掲載している。（1）は松山での、（2）は東京での講演内容である<sup>4)</sup>。その内容が



振るっている。どちらの講演も、内容的には以前の台北俳句集の「あとがき」の論点をあちこちつまみ食い的に取り上げたもので、一見支離滅裂のようだが、黄靈芝なりのひねりの利いた狙いがある。

松山でのそれは、「子規はわたしにとり啓蒙の師であり、またある意味においては終生の師でもあります」ではじまり、子規が俳句だけでなく短歌も作り、小説・評論・随筆など多くの分野を手掛けたのは「中国近世の文人たちと同じ意念のもの」だという（子規がまず漢詩人だったことには触れていない）。ここから黄靈芝一流の放談調になり、「子規のつくった句はすべて有季定型に従っていたのではなからうか……事すでに俳句には俳句のよさがあり、短歌には短歌のよさがあり、短歌には短歌の、また漢詩には漢詩のよさがある以上、当然有季定型には有季定型の、無季・自由律には無季・自由律のよさがあるはずであります。子規はなぜ無季・自由律の句をつくらなかったのでしょうか」と飛躍する。

黄靈芝はさらに進んで「せめて日本語の範囲内の、有季定型には有季定型の、無季・自由律には無季・自由律のよさがあることを肯んじた上での使い分けは、だれしも考えて然るべきではないのでしょうか」、ましていわゆる国際俳句での、「まちまちの字数の洋文の作をも俳句とよぶ以上、定型の問題はすでに存在しない道理です」。「言葉を変えていえば今から百年前の昔、明治三十一年に子規が《歌よみに与ふる書》を書いた時の歌びとたちが、無暗に短歌を有難がり、他の文芸を睥睨していた、それとそっくりな状態が現下の俳壇にも起こっているのではないかと疑われるのであります」と結ぶ。国際俳句賞を貰いに来て、日本俳句のメッカの松山で堂々と今の日本の俳壇の批判めいたことをいうのである。台湾俳句は決して日本俳句のおこぼれにあずかっているのではありません、と言いたかったのであろうか。

それなら台北俳句会で、無季・自由律の句を詠んでみたらよさそうなものだが、『台北俳句集』には、リズムの悪い句は多いものの、無季・自由律の句はまず見られない。「戦後台湾俳句小史（四）」で触れた、独特の表記をしたり、異言語を取り混ぜたりした「革命的な」黄靈芝の句も、自由律的な句は多いがみな有季である。またこの講演の少し前に刊行した『黄靈芝作品集 20 蟬三百句』（2003年12月）には、あくまで「蟬」にこだわっているため無季の句はないし、自由律のような句もたまに出てくる程度である<sup>5)</sup>。



一方東京での講演内容は、『台北俳句集』第20集の「あとがき」での日本の歳時記批判を思わせる。講演の主要部分はそれとほぼ同じなので、ここでは繰り返さないが、問題は連句を論拠にして現代の日本俳壇のあり方を批判する、結びに近い部分である。黄靈芝は「古人の作の多くは連歌における発句または付句だったのではないのでしょうか、不勉強のため私は連歌につき多くを存じませんが、たとえば蕪村の《牡丹散ってうちかさなりぬ二三片》には《卯月二十日の有明けの月》、凡兆の《市内はものの匂ひや夏の月》には《暑し暑しと角々の声》などがついていたと覚えます。もし誤りでなければ古人の五七五は一種の短歌の半分であり、今人のつくる五七五とは意味合いを異にしましょう。しかるにそれが肩を並べて同日に論じられること自体、妥当なのかどうか疑問はないのでしょうか」と、松山の場合と同じく、日本俳壇の批判めいたことをいうのである。

この「批判」には多少の疑義なしとしない。黄靈芝が連句をどの程度理解していたかは不明だが、連句をした経験がなかったことはほぼ確かである。むしろ彼は連句を「よく知らないのをいいことに」、ことによると「知らぬふりをして」いちゃもんをつけているのではないかとさえ思われる。いずれにせよ、黄靈芝は「正岡子規国際俳句賞」を、素直におとなしく受けに来たのでないことは確かである。

### 3. 『台湾俳句歳時記』刊行後の句会における 台湾季語句の詠まれ方

『台湾俳句歳時記』の刊行は外部で評判になったのであるが、肝心の台北俳句会の内部ではどのくらい活用されていたのだろうか。それには毎月の句会での投句にどの程度「台湾季語」が詠み込まれているのを見る必要がある。第四期は台湾季語の活用の実態を見るための期とも言えよう。自由詠で台湾季語を詠みこむ場合もあるだろうが、毎月の句会の「出題」(兼題)はどうなっていたのだろうか。一例をあげると、『台湾俳句歳時記』刊行後半年余り後の、2004年1月の句会報(黄靈芝の手書きによるプリント)に載っている、翌2月の句会案内には「出題 春聯／笑ひ初 または 泣き初／其他。自作三～五句を会前五日必着で下記へ(黄靈芝宅の住所とファックス番号)」となっている。

この「出題」(兼題)には解説の付くこともある。また「其他」(当季自由題)だけのこともある。この兼題には「春聯」のような「台湾季語」がかなり含まれている(ただし「台湾的」ではあるが、『台湾俳句歳時記』には記載のないような語が出されることもある)。またいずれの例会でも、兼題が台湾季語であるか否かにかかわらず自由に季題を選んで投句して差し支えない。第四期の前期四年間の兼題を見てみよう。

第一表 第四期前期四年間の月例会兼題

\*は『台湾俳句歳時記』にある季語、【 】は『台湾俳句歳時記』にも日本の歳時記にもない季語

	2004年度	2005年度
一月句会	年末年始の頃の自由題	穴惑ひ・尾牙 <sup>ホエゲエ</sup> *
二月句会	春聯*・笑ひ初/泣き初	旧正月*・熱爛
三月句会	上元節*・マフラー	咳・焼肉粽 <sup>シオバアツアン</sup> *
四月句会	当季自由題	アリツ祭(壺祭)*・四月馬鹿
五月句会	行事・動物・植物各一句 (陽暦五~六月頃の)	【午時卵 <sup>ゴーシイヌン</sup> 】
六月句会	梅雨(類似語を含む)・糸瓜*	晩春・初夏自由題
七月句会	夏季自由題	ビール
八月句会	台風または出水・父親節*	冷房(クーラー)・葉桜
九月句会	中元*(七月半/施餓鬼/ 鬼月/好兄弟など)・落第子	暑中見舞・寝冷
十月句会	八月大名・九月台風*	【かぐや姫】
十一月句会	小鳥来る・馬鈴薯	芋を掘る
十二月句会	湯気立・暦売	【大閘蟹 <sup>タアチアシエ</sup> (毛蟹 <sup>モオヘエ</sup> ・藻屑蟹 <sup>もくずかに</sup> )】
	2006年度	2007年度
一月句会	年賀状(賀状)その他自由題	寒の字を使って季語自由に、放風吹 <sup>バンホンツェイ</sup> * (紙鳶=凧)
二月句会	目が合うなど目を使った季語	自由題でおつくり下さい(日本伝統俳句協会来訪)
三月句会	春季自由題	百千鳥・鳥起狂*・其他自由題

四月句会	日脚伸ぶ・春蚊・その他自由題	初蝶・王爺祭・ <sup>ツオオンツン</sup> 焼王船・ <sup>サンオンヤア</sup> 送王爺・ <sup>サンオン</sup> 送王船 其他春季自由題
五月句会	夏の魚自由題・夏の蔬菜自由題(*を含む)・其他自由題	自由題(大阪俳句連盟より約30名来訪)
六月句会	<sup>ホオロンゴオ</sup> 火籠果* (さぼてんの実) 其他自由題	<sup>じょうこうさい</sup> 城隍祭*・颱風一号・其他自由題
七月句会	夏休・雷・其他自由題	トマト・其他夏季自由題
八月句会	呉郭魚* (ゴウクエイ・ごかくぎょ・セラピアなど)・其他夏季自由題	暑い頃の魚介類(例6種、金魚以外すべて台湾語読み*)・暑い頃の鳥類(すべて台湾語読み*)・其他暑い頃自由題
九月句会	残暑(秋老虎*・秋暑し)・孔子祭* 其他当季自由題	(賛助出詠の)福島せいぎ先生の句碑建立の写真コピー三枚を見て句をおつくり下さい
十月句会	燈下親し・ピーマン	布袋草(布袋葵・ <sup>フウタイレン</sup> 布袋蓮*)・其他自由題
十一月句会	土いぢり*(鉢換え*)・中秋 ほかこれにかかわる物または事	颱風に関すること(颱・輕颱・強颱など) 中秋にまつわるもろもろ(かぐや姫・月餅*・焼肉を含む)
十二月句会	朝寒・嫁娶*(娶り・婚季)・其他自由題	冬虫夏草・其他冬季自由題

上記のうち「<sup>ゴーンイヌン</sup>午時卵」は『台湾俳句歳時記』に正題ないし副題季題としてはないが、端午の正午に生卵を立てることが出来るとの記載が、2005年4月の句会報にある(本節後述の2005年5月句会の項参照)。  
【<sup>タアチアシエ</sup>大閘蟹】も『台湾俳句歳時記』には全く記載がないが、前回11月の会報で「近年來有名になった中国産淡水蟹」で「台湾産の<sup>モオヘエ</sup>毛蟹(日本の藻屑蟹。こちらは『台湾俳句歳時記』に記載されている=引用者)と同種か近縁らしい」と解説している。「落第子」も『台湾俳句歳時記』に記載がないし、会報でも解説していないが、日本では春の季語の「落第」が、台湾では9月に新学年が始まるので9月の句会の兼題に出されたものと思われる。「<sup>いとうり</sup>糸瓜」(<sup>ツァイクエ</sup>菜瓜・<sup>へちま</sup>糸瓜)は日本では秋の季

語だが、台湾では食用とし、「暑い頃」の季語とされている。「かぐや姫」は『台湾俳句歳時記』はもちろん、日本の歳時記にもないが、前回9月の会報の「十月句会案内」に「竹取物語の女主人公」として解説があり、「かぐや姫といえば中秋にのみ登場しがちだ。よって秋の季語と考えてよいかと思う」としている。

ここで見落とせないのは、台湾季語の出し方が意外と少ないのではないと思われること、さらには【午時卵】【かぐや姫】【大開蟹】のような、『台湾俳句歳時記』にも日本の歳時記にもない「季語」を新しく出題（兼題）していることである。【午時卵】や【大開蟹】は新しい台湾季語候補とも見られるが、【かぐや姫】はいかなる意味でも「台湾」季語ではないだろう。これは句会で絶えず新しい季語の候補を兼題として提出していることになる。台湾季語であろうとなかろうと、歳時記にあるから出題するのではなく、出された季語を集めたものが、一定の編纂過程を経て、結果として「歳時記」になるのだ、ということであろう。

しかもこのプロセスは実は台北俳句会の発足当時からあったように思われる。歳時記をルールブック化しない、歳時記に必ずしも縛られない、いつも新しい歳時記のための季語を探し、提出する。これこそが句会の役割なのである。句会が歳時記に縛られるのではなく、句会が歳時記を鍛えるあるいは育てるのである。既成の歳時記を金科玉条とする日本の多くの句会に見られない自由闊達さが、台北俳句会にはある（或いは、あった）と見てよいだろう。この自由闊達さが、やがて『台湾俳句歳時記』を生み出す原動力になったのだとも言えよう。——このように、『台湾俳句歳時記』刊行後も、「台湾季語」は依然として少しずつ創出されていたのである。いやこれはむしろ、新しい季語の模索が続いていた、というべきであろうか。

台湾季語の兼題に対する会員の反応は概して良好であると言っていい。2004年2月句会の「春聯」は日本の歳時記でも季語とされた一時期があったせいもあるろうか、黄靈芝を含め55人の投句者（欠席投句を含む）中35人が1句は春聯の句である。うち2句の人が8人、3句とも春聯の人が3人いるから、全投句165句中三分の二近い49句の春聯句が出たわけである（ただし投句は5～3句で、その中から黄靈芝が3句を選ぶのだから、個々の投句者が果たして何句春聯の句を詠んだかはこれだ

けでは分らない。春聯句がもう少し多かった可能性もある)。この句会での春聯の句で黄靈芝が秀句として○を付けたのは次の4句である(黄靈芝は秀句に黒丸●を付けるのが常だが、ここでは○を使用する)。

春聯や台北の人として老いて	陳錫恭
夫の書く春聯顧客に丁寧	周月坡
春聯や日ならず毀つ土角厝	寥運藩
店仕舞去年の春聯色褪せて	磯田一雄

興味深いのは台湾季語句とその他の季語句での、黄靈芝に秀句とされる割合の違いである。この春聯句は12.5句に1句だが、その他の季語の句は4.9句に1句の割合で秀句とされている。

同年3月句会の「上元節(元宵節・花燈節などを含む)」は、投句者53人中22人(41.5パーセント)、うち2句が2人、3句は1人もいない(計24句になる)。同じ年末年始の人事に関する台湾季語でも、上元節より春聯の方が詠みやすいということであろうか。これに対して上元節とペアで出された季題、マフラーを詠んだ人は34人(65.1パーセント)で、2句の人も多く、3句ともマフラーの人も2人いる。この時の○句の割合は、上元句が下記の2句(8句に1句)、その他の季語の句は5.5句に1句で、やはり台湾季語句が不利である。

人波に孫の手しかと上元節	徐靜英
燈節の猫は夜会の支度する	藤原若菜
土地公に捧ぐる一燈上元節	何秀慧

2005年1月句会の、日本流に言えば年末慰労会に当る「尾牙」は<sup>ボエグエ</sup>人気が高く、投句者50人中37人(74.0パーセント)が詠みこんでいる。3句はいないが、2句の人が8人いる。だが黄靈芝の○を得たのは僅か2句(29句に1句)なのに対し、他の季語で詠んだ句は5.9句に1句の割で○を得ている。

靴はかす菩薩の手とも做尾牙	陳宝玉
尾牙に酔ひて社長を呼び捨てに	高阿香

同年3月句会も51人の投句153句中「焼肉粽」を詠んだ句が35句あったが、○の句は3句(10.7句に1句)。その他の季語の句は6.8句に1句の割合で○を得ている。

同年4月の「アリツ祭」(壺祭)は平埔族の習俗で、あまりなじみのないためか、53人中24人(45.3パーセント)で、2句が6人、3句が1人なのに対し、「四月馬鹿」(萬愚節)は41人(75.5パーセント)で、うち2句の人が12人、3句の人が4人である(黄靈芝に秀句と認定された句は記録なく不明)。

同年5月句会に出題された、<sup>ゴーシイヌン</sup>【午時卵(端午の卵)】<sup>6)</sup>も、それに次ぐ人気で、53人中37人と三分の二以上の人が詠み、うち2句が8人、3句が3人で、全部で51句あったのに、やはり秀句とされたのは次の2句だけである。残りの108句は7句が○だから、15.4句に1句の割であり成績は良くないが、兼題句よりはいい。

またもテロ端午の卵すつと立つ	黄葉
卵立つ心やさしき人の手に	陳錫恭

同年12月の<sup>タアチアシエ</sup>【大閘蟹(毛蟹・藻屑蟹)】<sup>モオヘエ</sup>も似たようなもので、138句中(けがに・藻屑蟹を含めて)42句あったのに、○は次の二句のみ(21句に1句)、他の季語の句96句は15句が○(6.4句に一句)だった。

まれ人にまゐらす酒と藻屑蟹	徐静英
一年のまた過ぎてゆく大閘蟹	李秀惠

2006年度6月の<sup>ホオロンコオ</sup>「火籠果」(さぼてんの実)は○の句が7.1句に1句、その他の季語は3.3句に1句、12月の「嫁娶(娶り・婚季)」<sup>ケエツア</sup>は8.5句に1句、その他の季語は4.4句に1句の割合である。この月は兼題として「嫁娶」を選んだ句は17句しかなく、「朝寒」が41句もあったが、朝寒の句は○が5.1句に1句で、「嫁娶」の句より成績がいい(2007年度については、台湾季語句をやや特定しにくい兼題の出し方をしてるので省略する)。

兼題に台湾季語がなくても、台湾季語句を詠む会員も当然いる。民国03(2004年)年1月句会で見ると、投句者57人のうち、火鍋・烏魚子

(からすみ)・報歳蘭・做年稞(2人)・長年菜(2人)・当帰鴨・黒面鷲・土地公生の8季語計10人である(台湾季語を兼題にしない方が、数は少なくとも多様な台湾季語が詠まれる傾向があるのではないかとと思われる)。だがこの句会で○を得たのは全部で19句だったが、台湾季語句は「義齒つけて何を今更長年菜 高阿香」の1句だけだった。このように多くの場合、台湾季語句は黄靈芝によって秀句と認定される割合が、他の季語の句よりもずっと低いのである。黄靈芝は台湾季語を推進しながら、台湾季語句にはむしろ厳しい姿勢で臨んでいたと言っている。

ただし2004年8月句会の「父親節(父の日)」は10.3句に一句で、逆に他の句(11.5句に一句)より少し○句の比率が高い。「父の日」は日本の歳時記にもある季語で、春聯や尾牙のような台湾固有の季語とはニュアンスが違う。『台湾俳句歳時記』では「父親節」と中国語読みを<sup>フウチンチエ</sup>主題季語とし、台湾語読み<sup>フウチンツェツ</sup>の「父親節」と日本語の「父の日」を副題季語としている。したがってたまたま「父親節」が例外だったというより、上記の傾向は日本の歳時記にない台湾固有の季語を中心にとらえられるべきであろう。

いずれにせよ、この第四期初期の句会毎の兼題(宿題)としての台湾季語は必ずしも多くないし、会員が兼題とかかわりなく詠んだ句に「台湾的」なものが入っている割合も決して高いとはいえない。台湾季語は概して会員に好かれるようだが、句会で台湾季語句が秀句とされる割合は、一般に日本の歳時記にもあるような季語の句よりも低いとすれば、『台北俳句集』には当該年度の句会で秀句とされた句を中心に寄稿したくなるであろうから、勢い台湾季語句の割合が少なくなる、という傾向もあるのではなからうか。

#### 4. 台北俳句会における台湾季語の系譜

##### 4- (1) 台湾季語は最初期からあった

既に(五)で見たように、『燕巢』に「台湾歳時記」の連載が始まったのは、1989年12月号であるが、台湾季語はこの連載でいきなり生み出されたわけではない。台湾の風土に根差したと思われる季語を詠みこんだ句は、台北俳句会の創立当初から相当数が認められる。台北俳句会



においては、その創成期から「台湾季語」が用いられていたと言っている。最初はごく少数であったが、次第に年を追うごとにその数が多くなっている。しかしその使用頻度がそれに応じて高まっていく、とは必ずしも言えない。そこで第一期（創成期）までさかのぼって、台湾季語の使用状況の変遷を顧みてみよう。「台湾季語」らしい季語を詠み込んだ句はどのくらいあるのだろうか。

『台北俳句集』第1集の掲載句には、『台湾俳句歳時記』に記載のある「台湾季語」が既に17季題見られ、これらの季語で詠んだ句が28句ある。以下に現行の日本の歳時記に記載のない季語の10句のみ掲げる。この外に日本の歳時記にもある季語（佛桑華・荔枝・マンゴー・バナナ・施餓鬼・ザボン・ジャスミン・冬至）で詠んだ句が18句、また台湾季語と通常の季語との季重なるの句が8句ある。

孔子節・孔子祭	子は育ち縁の薄るる孔子節 青い眼の娘も混り居て孔子祭	辻野房子 呉建堂
相思樹	相思樹の林騒ぎて海光る	北条千鶴子
端午節	端午節せめて胃の絵をかかけ	李治香
教師節	童年の憶ひあらたに教師節 師となりて師の恩さとり教師節 教師節大成殿は賑はへり	呂鵠城 高秀 蕭慶賢
鳳凰樹	悲しみを沈めて朱に鳳凰樹	林昭美
仙草	仙草の湯呑み残して逝きし人	邱秀琴
月来香	水打ちて月来香の馥郁と	施碧霞

これらはすべて『台湾俳句歳時記』に収録されている季語である（同書では「教師節」は「孔子節」の副題季語とされ、「相思樹林」は「相思樹の花」になっている）。仏桑華・山茶花・荔枝・マンゴーなどを含めて、これらの季語で句を詠んだ人は計16人で、25人の投句者のほぼ3人に2人が何らかの「台湾季語」を用いていたことになる。つまり台湾季語の使用は台北俳句会の発足当初からあったのである。

ここで台湾季語句と判定する基準について述べておく。拙論で扱う「台湾季語」には三種類ある。①は『台湾俳句歳時記』にある季語の

うち、台湾独自の季語（その多くは台湾語）——上の例では「孔子節」から「月来香」までの季語——である。②は『台湾俳句歳時記』にあるが同時に日本の歳時記にもある季語である。上に掲げた「仏桑華」から「冬至」までの季語がこれにあたる。この点は既に「戦後台湾俳句小史（五）」で触れたことであるが、「台湾歳時記」で対象とした季語は「台湾独自の季語」だけでなく、「名称は（日本と）同じか似ていても内情の異なるもの」をも含んでいる。例えば同じバナナやマンゴーでも、台湾のように身近に産地のあるものと輸入されたのものとは内情が違う。また山茶花は日本では「さざんか」と読むが、台湾では「スアテエフェー」と読み、日本名にすると「やまつばき」または「やぶつばき」の類で品種も違っているのである。したがって拙論では、「秋刀魚」や「落花生」のように「これがどうして台湾季語か」と思われそうな季語も、『台湾俳句歳時記』にあれば「台湾季語」と判定している。落花生には「土豆<sup>トオクワ</sup>」という台湾名があり、秋刀魚は「チュートオヒイ」と日本名を台湾語読みするなどのほか、食品としての利用法や調理法などに台湾独自のもの——黄靈芝のいう内情の違い——があるためである。

さらに③として、第1集には見られないが、第2集以後には日本の歳時記にはなく、「台湾季語」と思われるのに、『台湾俳句歳時記』にも記載のない季語が相当数出てくる。こういう季語には、第一表で示したように、本稿では【 】を付して区別している。これは日本の歳時記を金科玉条としてこれに縛られない限り、ごく自然に起こることであろう。台湾季語句の場合、歳時記があつて初めて俳句が詠まれるのではなく、句会で多く使われる台湾的な季語を集積・整理・分類したものが、やがて「台湾歳時記」となり『台湾俳句歳時記』になったのであるから

また「台湾季語」を含んでいれば必ず台湾季語句とは判定していない。季重なる場合には、季語としての役割を果たしていないとして、台湾季語句の事例としないことにしている。第1集には、上に挙げた28句の外に、「ユーカリの梢もそよがず雲の峰」「螢火の消えるところに月来香」のような「台湾季語」を詠みこんだ句があるが、「ユーカリ」の句は「雲の峰」という季語があり、「月来香」の句は「螢火」という季語があるので、ともに季重なりとなり、「ユーカリ」も「月

来香」も季語の役を果たしていないと見られるので、ここでは台湾季語句としていない。「蛭の声を榕樹にあふれさせ」「鈴なりにマンゴー熟れて夏盛り」「新年を祝ふ爆竹野へ響く」のような句も同様である(下線部が季重なり)。実は台湾季語の認められていなかった戦前期の台湾で詠まれた句にはこういう句が多かった。「行く春や咲き揃ひたる胡蝶蘭 山本孕江]、「相思樹の花散る畦を塗りにけり 山本岬人]([『ホトトギス』昭和3年7月号「雑詠」)、「炎天や鳳凰木の花盛り小林きよし(同昭和3年8月号「雑詠」)のような句である。

そこで第1集から第6集までの第一期の「台湾季語」を、出現順に累積して見ると、次のようになる(【 】は『台湾俳句歳時記』にない季語、\*は日本の歳時記にもある季語)。

## 第二表 『台北俳句集』第1集から第6集までに現れた台湾季語(総計77季題)

第1集からある台湾季語：孔子節(祭)・孔子祭、相思樹(の林)、端午節、教師節、鳳凰樹、仙草、月来香(夜来香)、佛桑華\*、荔枝\*、マンゴー\*、バナナ\*、施餓鬼\*、仲秋\*、ザボン\*、山茶花\*、ジャスミン\*、冬至\*(17)

第2集で初出の台湾季語：糸瓜\*、落花生\*、文旦\*、【玉菜】、玉蘭、粽\*(むく・粽蒸す・売る)、椰子、爆竹、甘蔗畑、春聯、国慶日(11)

第3集で初出の台湾季語：清明節(清明\*・展墓\*)、<sup>ホータン</sup>補冬、城隍祭、中秋\*、媽祖祭り、豊年祭、茉莉花、オキザリス、【冬筍】<sup>タンスン</sup>、ポンカン(椪柑)\*、秋刀魚\*(11)

第4集で初出の台湾季語：【青年節】、城隍祭、九月廳、番石榴、龍眼、【扒龍船・龍船・龍船比賽】、胡蝶蘭\*、【蟹蘭】、夜市、含笑(花)、鱈魚(麵)、愛玉子(冰)、木綿花、重陽節(14)

第5集で初出の台湾季語：旧正(月)\*、囲炉、【婦女節】、一期作、月見菓子・月餅・月見餅、花れんぶ(蓮霧)、牛の尾・牛冷す、木綿花、飛魚\*、虱目魚、菱採舟、鱈\*、鬼門\*、初学期(新学期)(14)

第6集で初出の台湾季語：佛手柑\*、金針花、【金馬獎】、百步蛇、【油粿】<sup>ユウゴエ</sup>、【火炎木】、パンヤ、【植樹節】、元宵、画眉鳥(10)

ここでは正題季語と副題季語との別をきちんと区別していないので、この累計数は大ざっぱなものであるが、第6集までに詠まれた「台湾季語」の累計総数は77、日本の歳時記にもある\*の季語を除いても53に達している。歳時記にあるか否かを問わず、このような季語で自由に句

が詠まれるのがまさに台北俳句会の特徴であろう<sup>7)</sup>。

#### 4 - (2) 投句者 1 人当たりの台湾季語句数の変化

そこで『台北俳句集』の各句集に見られる台湾季語の総数と、その句集における投句者一人当たりの台湾季語数(20 句中)を第 1 集から第 44 集まで通して見てみると、第一表ようになる。

##### 第三表 台北俳句集毎の台湾季語数と台湾季語句数の変動

投句者数には会長・黄霊芝を含む。賛助出詠(羽田岳水・福島せいぎ)は含まない。

【 】は台湾季語総数のうち『台湾俳句歳時記』に記載のない季語の数

発行年月	投句者数	台湾季語 総数	台湾季語 句総数	一人当たり 句数
【第一期】				
第 1 集 (1971 年 10 月)	25 人	17 【0】	28 句	1.12 句
第 2 集 (1972 年 10 月)	24 人	18 【1】	27 句	1.13 句
第 3 集 (1974 年 1 月)	29 人	15 【1】	43 句	1.41 句
第 4 集 (1975 年 1 月)	28 人	23 【4】	82 句	2.93 句
第 5 集 (1976 年 1 月)	25 人	28 【2】	50 句	2.00 句
第 6 集 (1977 年 1 月)	29 人	28 【5】	98 句	3.36 句
【第二期】				
第 7 集 (1978 年 2 月)	30 人	18 【0】	38 句	1.27 句
第 8 集 (1979 年 2 月)	37 人	25 【1】	70 句	1.89 句
第 9 集 (1980 年 2 月)	47 人	27 【4】	69 句	1.47 句
第 10 集 (1981 年 4 月)	57 人	39 【5】	96 句	1.68 句
第 11 集 (1982 年 4 月)	66 人	24 【1】	64 句	0.97 句
第 12 集 (1983 年 4 月)	74 人	30 【0】	69 句	1.06 句
第 13 集 (1984 年 7 月)	65 人	32 【8】	45 句	0.69 句
第 14 集 (1985 年 7 月)	65 人	28 【3】	46 句	0.71 句
第 15 集 (不明・奥付なし)	67 人	24 【3】	28 句	0.42 句
第 16 集 (1987 年 8 月)	73 人	24 【3】	57 句	0.78 句
第 17 集 (1988 年 8 月)	67 人	27 【3】	72 句	1.08 句
【第三期】				
第 18 集 (1989 年 8 月)	67 人	9 【0】	22 句	0.33 句
第 19 集 (1991 年 3 月)	63 人	24 【1】	67 句	1.06 句

第20集 (1992年5月)	59人	90	【3】	334句	5.59句
第21集 (1993年2月)	68人	95	【3】	300句	4.41句
第22集 (1994年6月)	70人	99	【6】	328句	4.68句
第23集 (1995年10月)	65人	116	【13】	291句	4.47句
第24集 (1997年3月)	62人	137	【8】	296句	4.77句
第25集 (1998年12月)	60人	113	【12】	290句	4.83句
第26集 (2000年6月)	59人	155	【10】	319句	5.40句
第27集 (2000年12月)	65人	132	【6】	252句	3.64句
第28集 (2001年10月)	64人	89	【7】	242句	3.78句
第29集 (2002年1月)	59人	67	【1】	180句	3.05句

【第四期】

第30集 (2003年6月)	54人	36	【1】	99句	1.83句
第31集 (2003年8月)	56人	53	【5】	173句	3.08句
第32集 (2005年7月)	50人	73	【8】	148句	2.96句
第33集 (2006年7月)	48人	55	【7】	113句	2.35句
第34集 (2007年9月)	54人	62	【2】	138句	2.56句
第35集 (2008年3月)	51人	56	【6】	110句	2.16句
第36集 (2009年5月)	53人	63	【4】	122句	2.30句
第37集 (2011年9月)	50人	45	【1】	96句	1.92句
第38集 (2012年4月)	45人	56	【4】	110句	2.44句
第39集 (2012年8月)	50人	36	【2】	80句	1.60句

【第五期】

第41集 (2015年7月)	40人	53	【0】	42句	3.55句
第42集 (2015年7月)	40人	62	【0】	122句	3.05句
第43集 (2015年7月)	40人	43	【3】	72句	1.80句

(第41～43集の平均=2.8句)

第44集 (2017年2月)	40人	74	【1】	186句	4.65句
----------------	-----	----	-----	------	-------

『台北俳句集』の第40集は存在しない。また第41・42・43集は同  
 時刊行のため、投句者は3年分の投句60句を一挙に提出する必要が  
 あったので、台湾季語句が早い方の集に偏った可能性がある。他の独  
 立して刊行された集と equivalent とは言えないので、3集を一括して  
 見るべきであろう。第39集 (1.6句) → 第42・42・43集 (平均2.8  
 句) → 第44集 (4.65句) としてみると、第44集の突出ぶりがいっそ  
 うはっきりすると思われる。

このように、第一期には台湾季語句数が増えているばかりでなく、台湾季語句が詠まれる割合も徐々に増えているのであるが、第二期になると、会員（句集投句者）は急速に増えているのに、全体として台湾季語数の変化が緩慢になる。第10集で台湾季語数は40語に近く、台湾季語句数も第6集以来再び100句に近くなっているが、以後しばらくは季語数・季語句数ともにむしろ停滞している。また台湾季語句を詠まない会員が多かったため、会員一人あたりの台湾季語句数はむしろ第一期を下回っている。第10集は台湾季語数や台湾季語句数はほぼ第6集と同じだが、投句者数が57人に増えているから、1人当たり1.68句にしかないのである。第二期は会員の急増が特徴になっているが、新たに入ってくる会員は、台湾季語に馴染みにくかったということであろうか。第二期は台湾季語を含む句に関する限り、「発展期」とは言えないのである。

これは新しい会員が台湾季語句に馴染みにくかった可能性のほかに、春燈俳句会との関係があるかもしれない。「戦後台湾俳句小史（四）」で見たように、台北俳句会を代表するような熱心な会員が『春燈』への投句に互いにしのぎを削るようなことになるにつれて、勢い台湾季語の句は詠まなくなった可能性がある。たとえ詠んでも「媽祖祭」を「媽祖春祭」とした句があったように、日本の歳時記で認められているような季語を用いた句でなければ、『春燈』では採って貰えなかったであろうから<sup>8)</sup>。これは「台湾歳時記」の編纂に反対する会員がいた、という事実にも関わりがあるであろう。

#### 4-(3) 『台北俳句集』に見る第三期の台湾季語使用頻度増加と 第四期における減少

第三期に入ると台湾季語句が急速に発展するようになったのは、既述のように『燕巢』1989年12月号から「台湾歳時記」の連載の始まったことと関係がある。連載が始まる直前に刊行された第18集（1989年8月）では、総季語数9語（重陽、相思樹、爆竹、豊年を踊る、教師節、清明、たいわんこぶら飯匙倩、閩帝祭、春聯）のうち「教師節」が12人、「重陽（の日）」が2人によって使われているほかは、それぞれ1人しか使っておらず、投句者一人あたりの台湾季語数は、0.33句と最低を記録したが、「台湾歳時記」の連載が始まった、1989年12月から1年余り後の、

1991年3月に刊行された『台北俳句集』第19集では、総季語数が24語、一人当たり台湾季語句数は1.06句になり、反転の様相を見せている。台湾季語句が飛躍的に増加するのは、更に一年余り後の第20集（1992年5月）からである。第20集では総季語数が90語、使用頻度は「龍眼」が18人、「文旦」が16人、「光復節」が15人、「豊年踊り（祭）」と「紅<sup>アンチム</sup>罎」（のこぎりがざみ）が14人、愛玉氷が13人、「釣水雞（蛙釣り）」が12人というように大幅に増加しているのみならず、一人あたりの台湾季語句数は5.59句と全期間を通じて最高になっている。これは明らかに黄靈芝によって、極力台湾季語で詠んだ句を出すように要請ないし要求するようになった結果であろう。第21集から連載の終了直後刊行の第25集（1998年12月）までは、毎回総句数300句前後、一人当たり句数も4句半から5句に近い。これは明らかに「台湾歳時記」の編纂により、これまでに使われなかった新しい台湾季語が出現してきたことの影響とみられる。春燈俳句会との場合とは反対に、燕巢俳句会との関係が、台湾季語句を増大させた、ということになる。注目すべきはその約一年半後の2000年12月刊行の第26集で、台湾季語数155、総句数319句と最高になり、一人当たり句数も第20集に近い5.40句に達していることである。それから半年後の2000年12月に刊行された第27集では、総句数252句、一人当たり句数3.64句に減少しているが、第29集までは3句台を保っている（実はこの頃台北俳句集の刊行が次第に遅れてきており、「台湾歳時記」の連載の終わった1998年（民国97年）の会員作品の合同句集は第28集（2001年10月刊行）とされている。第29集は2002年1月刊行だが、実際には1999年度の会員作品及びそれ以後の新入会員の合同句集であり、台湾季語数67語、台湾季語句数180句、平均句数3.05句と低下してきているのは、『燕巢』の「台湾歳時記」連載終了のためであろう）。

第四期に入ると、第30集（2003年6月刊行。実際には2000年度の合同句集）では台湾季語数36語、総句数99句、一人当たり平均句数1.83句と、大幅に下がっている。第31集・第32集（2001年度及び2002年度の会員作品の句集）は平均句数が3句前後だが、以後第39集まで平均句数は2句前後と、ひとところに比べれば少ないものは安定している。これは「台湾歳時記」の連載が終わってからかなりの時間がたち、その余波も減じてきたためであろうか。先に見た、台北俳句会の



二年間の兼題表からもこのことは読み取れる。だが台湾季語句の数は減っている。「台湾歳時記」の編纂と、『台湾俳句歳時記』の刊行で、台湾季語そのものは馴染み深くなったが、実際の句作ではそれほど詠みこまれていないということを示している。ところが第五期になって再び第三期に迫るような増加傾向がみられる。特に第44集は、第三期の第20集から26集に至る時期に匹敵する台湾季語を有している（これが何を意味するのは次回改めて論じたい）。

「月例会兼題」の箇所でも指摘したが、『台湾俳句歳時記』に記載のない【 】のような「台湾季語」があるということは、台北俳句会発足以来絶えず新しい季語が作り出され、使われたことを意味する。また一方では棄てられるプロセスもあったはずである。このことは第四期までは変っていない。しかし第五期に入ると、しばらく後に、毎月『台湾俳句歳時記』の季語が、初めは1題、やがて2題ずつ解説までそのままコピーされて句会の兼題にすることが行われている。こうなると『台湾俳句歳時記』が一種のルールブックとなり、そのため台湾季語句は再び隆盛になっても、新しい台湾季語が生まれるようなことはなくなるということになるかもしれない。ふり返って見ると、台北俳句会の歴史は、一面では台湾季語の消長の歴史でもあった、ともいえるように思われる。台湾俳句史は戦前から戦後さらに現在に至るまで、よくもあしくも台湾季語の問題に取りつかれてきた。これは台湾俳句史の最も著しい特徴であろう。同じ植民地俳壇でも朝鮮の場合このような季語の問題はあまりなかったようにみえるのである<sup>9)</sup>。

最後に会長・黄霊芝がどのくらい台湾季語句を詠んできたか、第1集から第43集まで通して見てみよう（『台湾俳句歳時記』にある季語の句のみ。第44集は黄霊芝逝去後の刊行<sup>10)</sup>）。

#### 第四表 会長・黄霊芝の台湾季語句数の変化

第一期	1集	2集	3集	4集	5集	6集	平均句数						
	0	2	1	1	2	5	1.8句						
第二期	7集	8集	9集	10集	11集	12集	13集	14集	15集	16集	17集	平均句数	
	3	2	3	2	1	0	1	0	2	0	5	1.7句	
第三期	18集	19集	20集	21集	22集	23集	24集	25集	26集	27集	28集	29集	平均句数
	1	2	15	15	9	7	5	3	2	9	15	0	6.9句
第四期	30集	31集	32集	33集	34集	35集	36集	37集	38集	39集	平均句数		
	0	1	4	0	5	1	0	4	2	0	1.7句		

第五期 41集 42集 43集 44集 平均句数

8 6 6 — 6.7句

これを見ると、第一期は第6集以外台湾季語が特に目立たない。台湾季語句を主導した様子は見られない。第二期は第17集を除き第一期よりもむしろ消極的な感じがする。会を挙げて台湾季語の編纂を行っていた第三期の平均6.9句は流石に多いが、句集によりかなりむらがある。第四期は再び第二期なみに戻った感じである。第五期には再び第三期なみに増加するかに見えるが、わずか3集のみのことで、第44集刊行前に逝去しているからその動向は断定できない。いずれにせよ台湾季語句の変遷は、台北俳句会にとって、とりわけ会長・黄靈芝にとって、俳句探究活動のシンボルだったといえよう（第29・30・31集は全句「蟬」のみが季語の句<sup>11)</sup>（一句だけ台湾季語の「羽衣蟬」、また第35・36集は全句「颯」のみが季語の句を載せている。ともに台湾に縁の深い季語だが、「蟬」・「颯」だけでは台湾季語と認め難い）。

## 5. 台湾季語句数変動の意味——「台湾的」表現と「日本的」表現の葛藤

『台北俳句集』に見るかぎり、第三期には台湾季語句を会員が熱心に詠んだのに、第四期になると、『台湾俳句歳時記』の刊行にもかかわらず、台湾季語句があまり詠まれなくなったのではないか、という疑問を持った筆者は、2006年11月25日の黄靈芝文学に関する真理大学のシンポジウムで、次のような趣旨の「素朴な疑問」を提起したことがある。「かつて、あれほど苦勞して十三年もの歳月をかけて『台湾俳句歳時記』をまとめたはずの黄靈芝自身が、一旦仕上げてみると余り台湾季語にこだわらず、かえって周囲のものの方が台湾季語を詠み込もうとしているかのように見える。これは一見不思議なことのように思われる。なぜなのだろうか」と。

この疑問に対して黄靈芝は、この点は「私自身が疾うに気づき、我ながら情けなくおもっていた傷どころだったからである。まさに傷口を逆撫でされた痛いお言葉であった」と言って、こう答えている<sup>12)</sup>。

一つには『台湾俳句歳時記』は何のためにつくられたのか。かつて存在した史的な出来事を、その痕跡を残したかったまでなのか。それとも現役作家の指針または参考にするためのものだったのか、道理としては当然両方であろう。然るに実際の現象から見ると、月々の例会の出句に台湾季語を用いた作例が決して多くない。甚だしきに至っては歳時記の著者の作からして日本季語を用いた句が断然多い。一体なぜなのか。……鋭い指摘であった。ぎゃふんとするしかない。

この少し後で黄靈芝は次のように釈明している。その論理は必ずしも明白でないが、句会内部の状況と関係のあることは理解できる。

……当初、台湾歳時記が企画された段階で、会員の数人が強烈に反対の意を表した。理由は二つ。すなわち「台湾人ごときに歳時記など書けるはずはない」「書けば恥を晒すだけだ」という卑下説だ。二つは……「俳句は日本文芸説」。(季語に)台湾語などを混ぜたところで日本の先生に台湾語などわかりようもないし、理解もできない。我々一群の異邦人は単なる団栗の背比べをしているに過ぎず、俳句の本当の好きなどわかってはいない。日本の先生に褒められてこそはじめて一人前なのだ。こうして台湾の俳句会よりもむしろ積極的に日本の結社に投句される。日本人を師とすることは植民地育ちの人間にとり、それが模範生であればあるほど強烈なものたしかだった。(中略)

……現象として台湾の年配層——日本文化の薫陶を受けたことのある諸氏にとり、俳句はなぜか日本的に詠む方が詠みやすいのである。道理からいえば、日本領時代のわれわれの多くは生活の場では日本語と台湾語を混ぜて使うのが普通で、その方がむしろ通じやすかった。この現象は今日にも受けつがれ、若者たちは多くの中国語と台湾語を混ぜて喋る。ゆえに「台湾歳時記」のように台湾語の介在が主体となった季語を用いることには、少なくともわれわれ年配者には至適の方式だったはずである。が、それが真実にはなぜか癩ってしまうのも事実であった。

いうまでもなくことばとは文芸にとり工具である。使い慣れた工具はやはり使いやすいのである。また別に俳句がもともと日本の文芸であるからには、日本語でつくるのが本筋だという見解の人もあるらし

い。殊に模範生だった人には知らざる日本語などなし、という矜持もあるであろうから、沽券の問題もあるかもしれない。……

これは春燈など日本の句会に積極的に投句している会員に台湾季語句が少ない傾向があることも見合うように思われる。台湾で俳句を詠むような年配者はやはりどうしても日本的なものに惹かれるのだということであろう。また台湾歳時記の編纂過程で、黄靈芝が「台湾ファースト」の姿勢を強めていったことも、あるいは裏目に出ているかも知れない。台湾的な句想への拒否反応が現れたとも言えよう。第四期の月例会会での兼題への台湾季語の出し方が遠慮がちで、時に「かぐや姫」のような、どう考えても台湾にふさわしいと思われぬような「季語」を強いて出題しているのも、「台湾季語というよりは新しい季語を模索しているのだ」という姿勢を示そうとしたのかもしれない。「台湾色」を出すのをしきりに抑えているかのようには見えぬ。

かつての黄靈芝は、台湾色を出すことにもう少し戦闘的だったのではないか、という疑問があるいっぽう、台湾季語を用いた句には、往々にして安易な作があるようにも思われる。黄靈芝が○を付ける句の割合が、台湾季語句の方が低いのは、それを裏書きしているともいえる。敢えて忖度すれば、台湾季語にこだわり、台湾俳句をあげつらうことが台湾の俳句愛好者を狭い範囲で自己満足させ、結果的に優れた俳句を生み出せなくなってしまうことを黄靈芝は内心怖れていた、ということなのかもしれない。

これは図らずも、戦前期台湾で西岡塘翠らによって「台湾歳時記」の必要性が説かれた時の、台湾俳壇を想起させる。阿部誠文は当時の台湾俳壇の状況を次のように論評している。

たしかに、歳時記を編むのも一つの方法である。しかし、佳句がないと、なかなか季題として認められない。つまり、その前に、することがある。台湾の風物を研究することである。そして、佳句を作ることだ。それには……写生の技をみがかねばならない<sup>13)</sup>。

俳人は、対象素材の研究や写生など、俳人として基本的な句作力を身につけ、第一に出てくるのは個性であり、そうした俳句のなかから、

おのずと、にじみ出てくるのが地方性であり、それは第二義的なものだ……。 (中略) しかしながら、台湾にあって、台湾でしか詠み得ない句を詠みたいというのは、その作者の記念としても、人情としても理解できるであろう。……愛情をもって台湾を見、台湾に生き、写生や表現法や季題の用い方にも研究を重ねるならば、台湾でなければ詠めない俳句の秀作も詠み得るであろう。そうしてこそ、台湾季語も認められる<sup>14)</sup>。

つまり台湾季語を用いるか否かの問題は、単なる題材 (句想) の問題にとどまらず、写生や表現法など句法の問題とも切り離せないということである。もちろん「台湾歳時記」がついにできなかった戦前期台湾俳壇と、『台湾俳句歳時記』刊行後の台北俳句会とでは、事情が異なるが、これを台北俳句会の句作の実態に即して言い換えれば、日本的なるものと台湾的なるものとの葛藤は、句想のみならず句法とも関わっているということであろう。今回はこの点を第四期における句会での黄靈芝の俳句指導——会報の句評——を中心に考察することにしたい。 (未完)

## 註

- 1) この学術研討会で筆者は次のような発表を行った。「台湾俳句之再超越——黄靈芝俳句觀在台北俳句会中所做的俳句指導」(原題は「台湾俳句を超越るもの——黄靈芝の俳句觀と台北俳句会における俳句指導」。発表要旨は中文で刊行されたが、発表は日本語でしている。なお翌11月26日に同じ会場で、「第三届台湾文学與語言國際學術會議」があり、筆者は「日本統治期台湾における日語短詩文芸と国語教育」という発表を行った。これは「戦後台湾俳句小史 (一) ——戦前期台湾の国語教育と俳句・短歌——」『成城文藝』第239号と内容的に関わりがある。
- 2) 『燕巢』には同人の投句欄「樟葉集」と一般会員投句用の「燕巢集」とがあり、かつては前者には黄葉・張宣爐・蔡西川・李錦上・文錫樾など台北俳句会を代表する俳人たちが同人となり、あるいは一般会員として (時には両方の集に) 投句していた (人名のゴシック太字は仮字)。また俳誌末尾の各地の支部に相当する句会の報告欄に「台湾燕巢会」という欄があり、台北春燈句会の場合と同じく、他にかなりの数の台北俳句会に属さない燕巢俳句会会員がいた。しかし刊行最後の年2010年になると、先ず「台湾燕巢会」の欄が消えた。台湾からの投句も徐々に減って行って、「燕巢集」では2010年7月号に1人、「樟葉集」では2010年9月号に1人あったのが最後になった。『燕巢』終末の2010年10月号から12月号までの三つの

- 号からは、台湾俳人の名が全く見られなくなってしまったのである。
- 3) 羽田岳水「黄霊芝先生の受賞」『燕巢』2005年3月号。
  - 4) 時間の関係で一部省略したとしている。なおこの(1)と(2)は両方とも『台北俳句集』の第32集(2005年7月)の「あとがき」の後にもそのまま収録されている。
  - 5) 例えば、「初蟬に、雨、雨、雨」、「蟬の逃ぐ 天に穴」、「少年兵に蟬 陸軍は」、「蟬捕って飼っては放し飼っては放し」、「まっさらの蟬 電池まっさら」、「ダリの髭 蟬の脚 巫」などであるが、その出来はともかく、数からして全体の数パーセントに過ぎない。黄霊芝の提唱する漢語による俳句「湾俳」の場合も、季語は使用するが、使用漢字は7字から12字までというように、自由律が前提になっていると見てよいだろう。
  - 6) この季語については、同年4月の句会報に次のような解説がある。「陰暦と月五日の端午の日の正午、宇宙に何かが起きるらしい。この時に汲んだ水は午時水とよばれ、薬用とされ、年を越しても腐らないといわれ、またこの刻には鶏卵を机の上に立てることができる。この時の卵を「午時卵」とか「端午の卵」と呼んでもよいだろう」。
  - 7) 戦前期台湾俳壇の代表的な俳句会であるゆうかり俳句会の刊行した、山本孕江・三上三字搭編『ゆうかり俳句集』(1935年)は、解説はないが歳時記のように季題別に俳句を並べており、台湾季語と認められるような季語がかなりある。これらの季語は大部分が『台湾俳句歳時記』の季語と重なっている。また高浜虚子編『新歳時記』(三省堂、1934年初版)の「改訂版」(1940年)は、朝鮮半島や中国大陸、東南アジアなどに熱帯地方で詠まれる俳句を対象に、季語を大幅に増やしているが、その中には、台湾に関係があると思われる季語がある。拙論「植民地台湾における日本語俳句の受容と課題——植民地朝鮮俳壇と比較して」『跨境 日本語文学研究』第3号、韓国・高麗大学校 GLOBAL 日本研究院、2016年6月、151-155頁。
  - 8) もっとも日本の俳句会でも、句会や時期によって違いがある。『春燈』では、安住敦主宰の頃、「榕樹」を季語とした加藤山椒魚の句がそのまま採られている。後年筆者が、足立公彦主宰選の『春燈』に、やはり「榕樹」を季語とした句を試しに投句したら、「榕樹緑陰」と直されていた。榕樹だけでは季語と認めないということである。「媽祖祭」を「媽祖春祭」としたのと同工異曲である。
  - 9) 戦前期の朝鮮俳壇における季語の問題については、前掲「植民地台湾における日本語俳句の受容と課題」の「4 朝鮮色・朝鮮季語への朝鮮俳壇の対応」参照。
  - 10) 筆者が初めて入手した『台北俳句集』は第26集・31集・33集であるが、黄霊芝自身がこの三つの句集に、台湾季語句をそれぞれ4句・1句・1句しか出していないことに気が付いた。これに対して台湾川柳会長の李琢玉

が、10句・13句・6句と三つの句集を通じて最も多くの台湾季語句を詠んでいるのが興味深かった。これをどう解釈したらいいのかが、筆者の見出した問題の出発点であった。

- 11) これらの句は『黄靈芝作品集 20 句集 蟬三百句』私家版・2003年12月、に収録されている。
- 12) 黄靈芝「台湾における中文俳句——、私の、そして私たちの」『燕巢』2007年8月号。
- 13) 阿部誠文「台湾俳壇史 (42)」『燕巢』2003年6月号。
- 14) 阿部誠文「台湾俳壇史 (43)」『燕巢』2003年7月号。